

総合討議の総括

統一テーマ 「ロマンス語における新語」

黒沢 直俊*

Naotoshi KUROSAWA

日本ロマンス語学会第44回の統一テーマに関する発表は以下のものであった。

- (1) 「現代スペイン語における接頭辞 *anti-*」 駒澤大学 上野 勝広
- (2) 「スペイン語における電子機器関連の略語に関する考察 -CREA を用いて-」
早稲田大学 泉水 浩隆
- (3) 「スペイン語における新語の傾向」 立教大学 佐藤 邦彦
- (4) 「コルシカ語における新語形成と ADECEC」 横浜国立大学 長谷川 秀樹
- (5) 「スイス・ロマンシュ語における新語形成と受容の諸問題」
東京外国語大学 富盛 伸夫

発表に引き続き、東京大学の上田 博人教授の司会で統一テーマに関するパネルディスカッションが行なわれた。

1. テーマの所在

新語、すなわち *néologisme* ネオロジスムは、従来存在しなかった事物や概念を表すために当該言語に作り出される新しい語、またはその形成プロセスを指すものと考えられる。語という単位は必ずしも厳密に定義出来ない場合もあるので、語または表現くらいに考えたほうがよいかも知れない。語彙は、音韻や形態など言語の他のレベルに比べて、より開かれた集合体を形成するので、当然のことながら、その変化も支配する法則性を見つけにくい場合が少なくないだろう。反面、新しい事物や概念という点では言語外の現実との関係がより密接であるとも言える。新しい事物や概念を表すためには、既存の単語の意味を拡張して新しい意味や用法を表現するということが可能である。これも一種のネオロジスムと言えないこともないが、形式として新しい単語は作り出されない。

従来なかった単語形式が作られるプロセスとしては、①借用によるもの、②当該言語の語形成の規則に従ったもの、のふたつを考えることが出来る。借用は、ある意味で言語接触の結果であるが、音韻や文法などの点では受け入れ側の言語の規則に従うのが普通である。現象が大規模にわたるため受け入れる言語の構造を変えてしまうこともある。ロマンス語の歴史を通じて学者語 *mots savants*、半学者語 *mots demi-savants* などと呼ばれているものはその時々々のラテン語からの借用による新語形成の結果である。スペイン語やポルトガル語などイスラム世界と密接な関係を持った地域に話されている言語ではアラビア語からの借用語が多く存在する。ルネッサンス以後のイタリアの影響力や、近代における国際共通語としてのフランス語の存在、そして20世紀後半の英語の国際語化の動きなど、それぞれイタリア語、

フランス語、英語を起源とする借用語を多くの言語に供給して来た。近年では情報関連の新語の氾濫で英語からの借用語が目立つようになった。借用におけるポイントは、受け入れ側の言語の規則や文法範疇などがどのような形で与えられるかということであり、特に今回の発表やその後のディスカッションからも分かるように、名詞では文法性の問題が大きい。

次に、当該言語の語形成の規則に従った新語形成については、伝統的には、合成や接辞を用いた派生などが考えられる。発表で言及された略号による新語形成は、略号そのものの並べ方が、当該言語によるものか、他の言語の順番に従うかという点はあるにしても（エイズを AIDS とするか SIDA とするかなど）、新たに語を作り出す行為と言えないこともなく、結果的にその点で、当該言語の派生規則などに従った新語形成である。

新語の対極に位置するものが廃語 *obsoletismo* であるが、ディスカッションのなかで多少関連する内容が述べられたものの、直接の言及はなかった。考えて見れば、辞書という架空の語彙の集合体が規範を支配している、いわゆる文明諸語にあつて、辞書に載っている廃語というのは、感覚的におかしい。むしろ、現代という短いタイムスパンのなかでは、新語のかなりのものが一過性のもので、実は、新語と廃語は、それ自身で表裏一体のものとも考えるほうがしっくりするようにも思える。

ロマンス語の中でも国家語となっているものは長い期間にわたって規範化と語彙の整備が進んだため、現代ではすべて自然発生的に起こったような錯覚さえ抱かせるほど、あらゆる分野での使用が可能になっている。ところが、20世紀以降に、このような規範化と語彙の整備、すなわち新語形成が意図的に言語政策の一環として行なわれている地域がある。「少数言語」と言われるものがそれで、従来、使用域が家の中などプライベートな生活空間に限られていたため、公共生活などで必要とされる専門的な用語や抽象的な語彙を形成してこなかった言語である。民主化の進展と EU の言語政策などの関係で、近年、このような言語の整備が進んでいる。コルシカ語とロマンシュ語についての発表はまさにこの点に関するものである。

2. 発表について

5名の発表者のうち4名の論文は本誌に掲載されているので、そちらのほうを参照されたい。ここでは簡単に、発表のテーマや骨子について触れることにする。

(1) 「現代スペイン語における接頭辞 *anti-*」

駒澤大学 上野 勝広

発表は、スペイン語の接頭辞 *anti-* による派生の新語形成を扱ったもので、辞書の定義や見出し語を詳細に検討した後、アカデミアのデータバンク CREA を用いて、いくつかの語について、形態論上の性数変化におけるゆれという問題を考察している。

(2) 「スペイン語における電子機器関連の略語に関する考察 -CREA を用いて-」

早稲田大学 泉水 浩隆

インターネット時代になって数が増えた ADSL, BBS, BIOS, CMOS, CPU, GPS, HTML, WWW, PC などの略語について、やはりアカデミアのデータバンク CREA を用いて文法性の付与や冠詞の非使用、複数形の有無などについて調査したもので、異なる地域のスペイン語の間での用法の異同や関連性などについて考察したものである。

(3) 「スペイン語における新語の傾向」

立教大学 佐藤 邦彦

既存の語からの新語形成として、特に新語からさらに新語が形成される場合について考察したもので、一部削除、合成語と混成語、略字語、英語からの借用語をもとにした派生などが扱われている。発表者も後に述べているように、用例は WEB や若者向けの雑誌、あるいは巷での見聞などにも配慮しながら収集されたもので、場合によっては一過性と思われるものも少なくないというが、むしろそのようなデータを扱いながら、スペイン語の一般的な傾向を浮き彫りにすることを目指したもので興味深い。

(4) 「コルシカ語における新語形成と ADECEC」

横浜国立大学 長谷川 秀樹

コルシカの民間の文化団体である ADECEC の新語形成活動を考察したもので、イタリアとフランスという2つの大きな影響下にあつて、特に、第二次大戦後のコルシカの「非イタリア化」という流れのなかで、コルシカ語がフランス国内にありながら独自の言語としての地位を確立した歴史的背景が明らかにされている。

(5) 「スイス・ロマンシュ語における新語形成と受容の諸問題」

東京外国語大学 富盛 伸夫

スイス・ロマンシュ語は口語テキスト創成と語彙創造の歴史において、印刷技術の発達により地方出版が活性化された16世紀初頭が最初の発展期といえる。特に、新約聖書のロマンシュ語エンガディン方言への翻訳と出版を独力で成し遂げた Jachem Bifrun (1506-1578) の翻訳テキストを分析すると、新たなレアリアやキリスト教信仰上の概念を表現するための新語形成のプロセス(ラテン語語彙から直接、あるいは部分的にロマンシュ語化しての借用; 語義の拡張・換喩的用法; 分析的・説明的な動詞句形成; 日常的語彙の発掘・積極的活用、など)が明らかになる。さらに、想定読者である青年層にあててかかれた聖書序文を検討するとロマンシュ語翻訳についての問題意識と一般読者への配慮が明確に把握される。

新語創造の第二期は、ロマンシュ語の存続に向けて言語政策が強力に進められている現代である。1980年代からコイナーとしての統一文章語 Rumantsch Grischun が提唱され採用されたことと平行して新語が「新語制定委員会」によって大量に供給され、メディアによって広められるようになった。とりわけ1996年の公用語化以来、ロマンシュ語で書く公文書および対外的な書類の言語はすべて Rumantsch Grischun に準拠することになったことが一層の推進力となっている。発表者は新語形成に関わる現地調査をふまえ、一般言語使用者と言語政策の実行側との意識の乖離と実際上の問題点を事例から指摘した。

3. 質疑応答

(以下の内容は当日の録音をもとに要約、再現したものである。細かい内容については不正確を避けるため省略しているところもある。)

司会：これから30分の予定で総合討議のパネルディスカッションに入ります。最初に5名の発表者のそれぞれの方から1,2分でまとめや補足などを簡単に述べていただきたいと思えます。

上野：データの対人地雷という例についてですが、スペイン語だけではなくポルトガル語、フランス語、イタリア語など平行する例を見てみました。スペイン語とほぼ同じ傾向を示しているのではないかと思います。ただイタリア語は、形態が他とちがって *persona* にあたる形ではなく *uomo* を用いた合成形もあるので様相がちょっと異なります。また、他のガスマスクという例では、中南米の例が多かったのですが、異なった形も多く、なかなかひとつの普遍的な形態を導くのが難しい状況です。

泉水：PCの例についてですが、略語については略語のもとになっている英語に対応するスペイン語の名詞の性が、その略語の性を決定する上で大きな影響を与えているのではないかと一言付け加えたいと思います。

佐藤：今回取り上げた例の多くはインターネットや若者向けの雑誌などのものです。なかには一過性のものとみなされるようなものも含まれています。しかし、たとえそうでも、スペイン語の語形成における *intuition* のようなもので共通するものを取り出せるのではないかと考えています。

長谷川：ADECECのINFCOR計画に関して、ここからの語彙の例をハンドアウトで挙げました。INFCORは、語源が示されている点ですぐれているのですが、それによるとイタリア語起源の語は、フランス語やラテン語に比べると非常に少ないということをつけ加えておきたいと思えます。

富盛：スイス・ロマンシュ語に関して現在集められているコーパスにはある種の偏りがあったて、佐藤さんの発言にも関係しますが、コーパスの質によっては必ずしも話者の言語意識や語形成の内的な規則を反映していない可能性もあります。新語創造に関する状況としては、現在のスイス・ロマンシュ語では統一文章語という人為的に設定した共通語を普及させようとしているので、とりあえず緊急避難的に必要な新語を作って、それを辞書という形で出して公文書が書けるような言語に育てるといった政策的背景があります。そのような中で一般のロマンシュ語話者の言語意識と日常の言語生活がどうであるかという調査をすることの重要性を感じた次第です。

司会：ありがとうございました。それではみなさまの方から質問、コメントなどをお願いいたします。

小林：大阪市立大学の小林です。佐藤さんの発表に関連してですが、発表のなかで派生語尾で *-ario* よりも *-aro*, *-ero* のほうが多いと発言されました。*-ario* はスペイン語においてはラテ

ン語の語源的な形を保存したものです。-ario が-ero に変化したのが歴史的な変化ですから、派生において-ario を選択するというのは人工的な操作です。従って、それがなくなった、あるいは少ないというのはある意味では当然のことだと私は思います。-ario と-ero の関係は他の言語ではどうなっているのかということに関心を持ちました。

司会：他のロマンス語ではという質問ですが、いかがでしょうか?... -ario は-ero よりも少ないというのは当然との指摘がありました。これについては、佐藤さん、いかがでしょうか？

佐藤：歴史的な流れを考えればそうであろうと思います。-ario による派生が廃れているのに加えて、そういう語が使われなくなるという過程があります。確かに、近代における-ario は *cultisme* であり、人工的なものですが、近代以降のスペイン語でも特に政治関係の用語などで-ario による新しい派生語が作られている例があります。そうでありながら、-ario による語が次第に使われなくなっていくということを指摘したかったのです。

秦：元香川大学の秦です。-ero と-ario との問題ですが、形からいうとラテン語に近いのは-ario ですが、時間的な経過からいうと、最初に-ero が出来て、後にそれを補うように-ario が作られるというのが実際ではないでしょうか。スペイン語の *primero* 「第1の」と *primario* 「初頭の」の例がこれにあたりますが、結果的に-ero のほうが多くなるというのはそうですが、その次の段階として、時間的な経過でそのどちらかが減っていくかというときに、歴史的な関係がそうであるから-ario が廃れていくというのは正しくないと思います。それぞれ造語の意図が異なっており、確かに-ario は後から造るので語の範囲が限られていると思いますが、-ero のほうも最初は自然に出来たとしてもやがてパターン化していくのだと思います。他のロマンス語、たとえばフランス語やイタリア語ではこのあたりどうなっているのか、スペイン語の *primero* 「第1の」と *primario* 「初頭の」にあたる形を出していただくとよくわかると思うのですがいかがでしょうか？

司会：今の例のような、ラテン語に近い形と民衆語で音韻変化を受けた形の *doublet* の例について他のロマンス語ではいかがでしょうか？意味的な違いなどはいかがでしょう？

秦：フランス語では「初等教育」というような場合と「第1の」という時でちがいはあるのでしょうか？

司会：フランス語についてですが、いかがでしょうか？

富盛：その例に限っていえば *primaire* と *premier* が同じ *PRIMARIUM* から由来したものです。意味と用法は分化しており、前者は形容詞で「最初の (もの)、第1の (もの)」, もうひとつは序数「第1 (の)」または形容詞「第1の、主要な」です。どちらかがフォーマルということでもありません。

司会：他にご意見がないようですので、別のテーマではいかがでしょうか？

秦：続けて恐縮ですが、新語の名詞の性についてです。同じ語義の単語がある時は男性、ある時は女性ということですが、これについてスペイン語の話者はどのように感じているのでしょうか。文法性というのははっきり決まっているものもありますが、どちらでもよいとい

う部分もあって、ひとつの極端な例として、写真集のタイトルなのですが、以前70年代に買ったものと、多少改訂された最近のものでは都市名の性の扱いがちがっています。これは極端な例ですが、名詞の性について、話し手は何かこだわりのようなものがあるのでしょうか？

司会：このテーマは、泉水さん、いかがでしょうか？

泉水：私も、この点、「インターネット」という単語が、これだけよく使われているのにもかかわらず違いがあるのはどういうことかということで研究をはじめました。どうでもよいということではなくて何かのメカニズムがあるのだと思います。対象物に近い類推可能なものの性とか、-a で終れば女性であるとか語形の問題もあるだろうし、あるいは元の言語の性ということも影響するかもしれません。外来語では、ポルトガル語の *o samba* は男性ですが、スペイン語にはいると *la samba* で女性になります。これは語形の影響だと思いますが、また、特に英語では性はありませんから、このような場合はスペイン語の該当する意味の単語の性などに左右されることもあるのではないのでしょうか。

黒澤：東京外国語大学の黒澤です。ポルトガル語にも同じような状況があり、*internet* は、ブラジルでは男性ですが、ポルトガルでは女性扱いになります。また、不定代名詞の *nada* は、名詞化して使うときスペイン語では女性だと思いますが、ポルトガル語では男性形の定冠詞をつけます。そこで質問は、性の決定に関して、語形や連想などの要因を除外した時はどちらかがデフォルトになるのではありませんか？二項対立の考え方をなんにでも適用できるとは思いますが、性に関しては、他の条件がなければ男性になるのではありませんか？もう一点は、佐藤さんの発表で略字語からの派生というものがあり、大変面白かったのですが、特に最近のインターネット関係の新語の氾濫について、これは従来からの新語とか言語接触という枠の中で捉えられるものなのか、それともまったく新しい現象なのか、いかがお考えでしょうか？

司会：質問は2点あって、1点目は性の決定に際しては男性がデフォルトとなるということですね。

泉水：男性がデフォルトではないだろうかというのは直感的にはそうであろうという感じはします。略語というのは見ただけでは決め手がないので、ネイティブの直感にかかってくるのでしょうか。ただ、もし男性がデフォルトであれば、もっと男性名詞が多くてよいのではないかという印象もあります。インターネット関係の語の多くは英語起源ですが、無冠詞で現れることが多く、このあたり文法性を回避したいという潜在的なものがあるようにも思えます。もちろん、これも含め、男性がデフォルトではないかということについては調べてみる必要があると思います。

司会：次の質問で、略語からの派生に関して従来の言語接触とは異なるのかという点ですが...

佐藤：その質問に答える前に性の問題について触れておきたいと思います。少なくともスペイン語では男性がデフォルトであるということはある程度は言えると思います。ただ、その

こととそれぞれの名詞が女性になるか、男性になるかということはちょっと別の話のような気がします。たとえば、-a で終るのが女性といっても、普通のスペイン語の単語ではないという意識が働くと、manga とか tanka などですが、これらは男性になります。英語からの単語などでも、-tion のようなスペイン語で対応するものが確立している場合は別ですが、そういう意識が働かないような、どちらとも決められない場合は大体男性名詞になるようです。それから、揺れがある場合ですが、泉水さんも指摘されているように対応するスペイン語の語の性などとの連想によるわけですが、その場合も何が念頭に置かれるかが決まっているわけではなくて、揺れがありえる、場合によってはひとりの個人のなかですら揺れることすらもあり得る。よくあるのは、外来語で形容詞として使われている場合で、名詞が省略されているとき、どういう名詞を想定するかで同じ人の使用でも性が異なるということがあります。しかし、一般的に言って、男性がデフォルトであるというのはいえると思います。次に略字語の件ですが、歴史的に見れば、たとえば中世のスペイン語などと比べてとか、このように考えれば、略字語からの派生というのは確かに現代的なものと言えるわけですが、しかし、特に、この10年20年の間に、略字語からの派生という点で大きな変化はないように思います。この間、その点で何か特別なことが起こっているとは私は考えていません。

司会：時間も少し過ぎているのですが、もうひとつ質問をお受けしたいと思います。いかがでしょうか？

古浦：元広島大学の古浦です。性の話ですが、日本語の名詞がイタリア語に借用されたときかなりのものが男性になります。イタリア語でも男性が基本だと思います。それともうひとつ富盛先生にお聞きしたいのですが、古いところと新しいところと両方発表されていてとても面白かったのですが、新しいところの方で、最近、認知度の調査をされたとのことですが具体的にどのような調査をされたのか教えてください。

富盛：認知度調査というところちょっと大きさになるかもしれませんが、1977年から1990年まで三度にわたって、またそれ以降一回の補遺的調査を行ないました。非調査対象者としてはエンガディン溪谷内の言語リーダーと見なされる新聞記者などのメディア関係者。この人たちは自分の記事の中でも「今週の新しい言葉」というようなものを書いていたりするような人たちです。それから学校の先生たちですが、もちろん生徒たちを対象として言語活動の指導的な立場にあります。その他、対極的に、日常的には創造的言語活動を社会的に行っていないような人たちなど、いろいろな職業の人たちを含んでいます。人数は一方方言区画で二十数名から三十名くらいで、質問項目を調査表にして同じ人たちに3度面談形式で調査を行ないました。そこで留意したことは、辞書編纂の現場や現地の言語委員会では媒介言語にドイツ語を使うのですが、私はなるべく他の言語からロマンシュ語への翻訳的質問は避けて、こういう会話の状況ではあなたはどのような単語を使うのが適切と感じられるか、を質問しました。適切な語彙が思いつかなければ、その場で作って提案してもらったり、新聞ではこの語が使用されているがあなたならばなんとするか、委員会はこういう語を提案しているが使いたいと思うかなどについて聞き取り調査を行ないました。統計的に有意な数値が出るほど

の量ではありませんが、話し手の直感的な部分がかかなりよく捉えられたと思っています。

司会：ありがとうございました。時間も過ぎましたのでこれでパネルディスカッションは終りにしたいと思います。

3. まとめ

冒頭で述べたように新語形成は、大雑把に言って、借用と語形成のふたつに分けられる。借用については、やはり言語学的関心は、受け入れ言語の文法構造にどのように組み入れられるかということが中心で、その意味で名詞の文法性の問題がとっつきやすいテーマとなった感がある。他方、語形成とも関連して、質疑応答の-ario と-ero の議論でも見られたように、歴史的な背景と、その反映であると同時に新たな変化への出発点でもある共時的な平面との関係はそう単純でもなさそうだ。今回は扱われなかったが、廃語という問題もはたしてどうなっているのか今後考えてみたい課題である。

*本総括は事務局で取りまとめた。下原稿を黒澤が作成し、また発表者で論文を提出していない富盛が発表についての紹介部分を加え、司会者の上田の校閲を経たものである。このような事情であるため、今回は、テーマに関する学問的あるいは研究史的な所在よりも総合討議に関わるパネルディスカッションの模様を再現することに力点が置かれている。